



Title	「ものだ」の意味用法についての一考察
Author(s)	張, 力丹
Citation	研究論集, 23, 303 (左) -322 (左)
Issue Date	2024-01-25
DOI	10.14943/rjgshhs.23.l303
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91099
Type	bulletin (article)
File Information	17_rjgshhs_23_p303-322_l.pdf



[Instructions for use](#)

「ものだ」の意味用法についての一考察

張 力 丹

要 旨

本稿は、形式名詞の「もの」とコピュラの「だ」とが組み合わさったこと
によってできた「ものだ」から派生したいくつかの特定の意味用法を見直し
たものである。寺村（1984）で提示されている置き換えテストの適用性を確
認することを通じて、〈本性、本質〉を表す「ものだ」は助動詞として捉えら
れるべきことを示した。形式名詞としての「もの」には照応性が認められて
おり、文脈指示の前方照応か後方照応をなしていることに加えて、主語や主
題が指示詞であれば、「二重照応」が生じてしまう。

助動詞の「ものだ」に〈一般性〉〈当為〉〈反期待〉といった3つの意味用
法があると考えられる。話し手が認識していることを一般的なものとして引
き上げる〈一般性〉は、話し手が直接経験したことにとどまらず、知識とし
て話し手に内蔵している現在と離れた昔のことを表すことも可能である。一
方、相手の行動を言及せずに話し手が一般的に認識していることを提示す
ることで相手の行動を促す〈当為〉と異なって、〈反期待〉は自分の期待や予想
にズレが発生した相手の行動について直接言及する、あるいは感想を表出す
るものである。また、昔一時期に続いていたことを思い出す〈回想〉に、懐
かしさのような情緒的な要素がポイントだと考えられるため、〈回想〉を〈反
期待〉の下位分類に位置づけた。

1. はじめに

本来実質名詞である「もの」は意味的な側面では、実質的な意味が抽象化、希薄化、あるい
は消失することに加え、形態・統語的な側面では、自立性を失い、専ら文法機能を担う要素に
なり、形式名詞になることがある。「ものだ」はそれこそ形式名詞の「もの」にコピュラ「だ」
を後続させて形成したものである。「ものだ」が文の述部に現れた場合、コピュラの「だ」が形
式名詞「もの」につくという構造で解釈されることが多い（例（1））。

- (1) 古くなって黄ばんだ封書がひとつの戦後をよみがえらせる一。それは松本重治さんの高木八尺さんあてのものだ。

(BCCWJ, 書籍, 昭和史への一証言, 河合達雄 (著), 下線は筆者)

ここでの「もの」は意味的に「封書」をさししめし、「それは松本重治さんの高木八尺さんあての手紙だ」に言い換えても文意がほぼ変わらない。また、「ものだ」が取り除かれた場合、この名詞述語文の述語要素が欠落しているため文法的には適切な文ではない。

- (2) この本は昨日買ったものだ。 (高橋 2010 : 137)

- (3) 学生は勉強するものだ。 (同上)

形態面で2つ以上の形態素が1つの固まりとなるにつれて新たな文法的意味も派生してくる、という構文化の過程を経た「ものだ」は、助動詞として認められることがある。(2)と(3)とは、「XはYものだ」という文型をとっている点が共通している一方、前者は名詞性を持つ用法で、後者は助動詞の用法である。「ものだ」には、名詞性を残し、助動詞と認められにくい用法と、助動詞と認められる用法とが交わって存在している。

本稿は、まず先行研究を確認してから問題提起をする。つぎに形式名詞「もの」にコピュラ「だ」が後接した複合形式の「ものだ」と、助動詞の「ものだ」という形態面ではまったく相違のない両者を見分ける判断基準を提示する。さらに、「ものだ」の前にテンス分化が許されるかどうかという点を踏まえて、「ものだ」の意味用法について具体例で考察を行いながら見直していく。

2. 先行研究の概観および問題提起

「ものだ」についての本格的な研究は、おそらく寺村 (1984) に始まる。寺村 (1984) は、以下のような意味用法をもつ「ものだ」が説明のムードにおける6つの典型的な形式のうちの1つという位置づけを与え、ムードの助動詞だと主張している。

- ① 理想の姿、当為を表わす。

「墨はゆるゆると、すずりの表面をなでるような気持ちですものです。力を入れて、ごしごしするものではありません。」

- ② 既に起った事件、現象、状態について、どういう成り行きでそうなったのか、その原因は何か、その背後の事情は何か、などを解説的に述べる。

「このガラスの切り口を見ると、だれかが、ダイヤモンドか何か固いもので切ったものら

しい。」

③ 追想，なつかしさをこめての回想

「1964年，第一回新興美術展が開かれたときは独立美術の連中多数が参加して，新しい絵画運動の精神にもえたものであった。（後略）」

④ 驚き。ある事実に（改めて）驚き，あるいは一種の感慨をおぼえたときの表現。

「（前略）根本は，若いときの彼の顔を思い出し，この男も年を取ったものだなど見ている。敗戦後の苦難と貧乏が堀川をよけいに老けさせたのであろう。」

（寺村 1984：301-305）

すなわち，上記4つの意味がいずれか読み取れるならば，その文に現れた「ものだ」が助動詞と判断できるとのことである。一方，寺村（1984）は，「PハQモノダ」という型をとって〈本性，本質〉を表す「ものだ」を，実質名詞としてのモノダと結びついた構造とし，助動詞とは認めていない¹。

（4）病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感じるものだ。

（5）運命というものは分からぬものだ。

（寺村 1984：298）

寺村（1984）の説明によれば，モノダがうけもっている役割は，「Pは，Qという内容をもつものだ」ということをいうために，Qという中味を入れる容器物として働くことである。つまり，「もの」が抽象的な容器物のように働いて，Pの類別を示すだけの名詞になっており，「病人」や「運命というもの」という主語をうけている。

寺村（1984）以降，「ものだ」の意味用法についての研究はほとんど寺村（1984）の考えを批判しながら受け継いでいるが，以上の〈本性，本質〉に関する考えはよく指摘を浴びているところである。

初山（1992）は，客観的な事柄を表す要素である「命題」と主観的な判断・態度を表す要素である「モダリティ」は文を構成する二大要素とする益岡（1991）の所説に立脚した上で，「ものだ」をモダリティの要素と考えている。「ものだ」を「モダリティの核要素」とし，それと呼応し共起する「大抵」「概して」「よくも」といった副詞的要素を「モダリティの呼応要素」と

¹ Pがその一文中に存在する「PハQモノダ」は，必ずしも〈本性，本質〉を表すわけではない。

例：男ノ子ハ泣カナイモノダ。（寺村 1984：299）

〈本性，本質〉と同じような形をとっているが，〈理想の姿，当為を表わす〉場合，助動詞化した「ものだ」と判定されることになるとも寺村（1984）は指摘している。

している。また、〈解説、説明〉の意味用法はほかの意味用法との間に意味的関連性が見出せないため、ほかの意味用法を持つ「ものだ」とは同音異義語の関係にあると考えている。それに加えて、「ものだ」の意味用法は①〈一般的傾向性〉②〈希望の和らげ〉③〈当為〉④〈なつかしさをこめての回想〉⑤〈驚き〉、という5つに分かれている。

坪根(1994)は、「ものだ」を助動詞と認めた上で、前接する命題について「一般的にこうだ」ということを、話し手の意思・判断として相手に訴えかけるという中心的な意味があり、そこから①〈本性・本質を表す〉②〈当為を表す〉③〈説明・解説を表す〉④〈過去の習慣・回想を表す〉⑤〈感情・感慨を表す〉、といった5つの用法につながりを持たせると主張している²。

日本語記述文法研究会編(2003)は、助動詞の「ものだ」に名詞「もの」の意味・性質が残っていると主張しながら、①〈本質・傾向〉②〈当為〉③〈回想〉④〈感心・あきれ〉⑤〈説明〉、という5つの用法を助動詞の「ものだ」の意味用法としてまとめている。そのうち、〈当為〉を表す「ものだ」は評価のモダリティ形式とされているのみならず、〈説明〉の用法も「のだ」との類似性により、説明のモダリティに帰属させられている。

高橋(2018)は、複合辞の「ものだ」に①〈本質・傾向〉②〈当為〉③〈回想〉④〈願望〉⑤〈感心・あきれ〉、といった5つの意味用法があることを確認した上で、「複合辞の「ものだ」の諸用法は、「関係節の構造³に由来する、主体にとっての“属性”を表すという傾向を反映していて、文の叙述を制限する機能により、《一般性》《確定性》という意味特徴が生じるという見方を示した」(高橋2018:295)と述べている。

以上の先行研究の概観から、まず確認できるのは、寺村(1984)以降の研究では、〈本性、本質〉がコピュラの「だ」と一体となった「ものだ」の意味用法の1つとして認められている、という点である。また、「ものだ」に助動詞という品詞タグ付けを与えている先行研究では、助動詞と判断するにあたっての根拠がほとんど示されていない、ということも見られる。しかも、①〈本性、本質〉⁴②〈当為〉③〈回想〉④〈驚き〉のような意味用法は研究者を問わず認めら

² 〈説明・解説〉を表す「ものだ」は、「完全なる形式名詞ではないが、非常に形式名詞の「もの」に近く、そこには「一般的にこうだ、ということ話を話し手の意思・判断として相手に訴えかける」モダリティの要素はない」と坪根(1994)も指摘している。すなわち、〈説明・解説〉を表す「ものだ」は、助動詞と認められにくいし、ほかの用法のいずれも有している「一般性」という性質を含んでいないのである。

³ 被修飾名詞と連体節の述語との間に格関係があると解釈できる構造である。「これは昨日買ったもののです。」は、被修飾名詞の「もの」を連体節内に入れて、「私が昨日(その)ものを買った」という文を作ることができる。このような構造は高橋(2018)において「関係節の構造」と呼ばれている。

⁴ 呼び方がそれぞれ異なっているにもかかわらず、初山(1992)の〈一般的傾向性〉、坪根(1994)の〈本性・本質を表す〉、日本語記述文法研究会編(2003)の〈本質・傾向〉、高橋(2018)の〈本質・傾向〉のいずれも、表したものの自体にほとんど違いがないため、ここで先駆的な寺村(1984)の言い方を引くことにした。後に続く〈当為〉〈回想〉〈驚き〉は寺村(1984)の言い方を略して示している。

れそうであることもわかってきた。しかし、いくつかの問題点が残されている。

- ① 複合形式の「ものだ」と助動詞の「ものだ」という形態的には同じように見えるが意味的には異なっている両者は、どのように見分けることが妥当であるか、寺村（1984）と高橋（2018）以外にあまり言及されていない。寺村（1984）と高橋（2018）の判断基準は適切かどうか問題となる。
- ② 〈説明・解説〉が助動詞の「ものだ」の意味用法の1つとして認められるか否かは、先行研究ではそれぞれ違うが、検討する余地が残っている。
- ③ 「ものだ」の諸意味用法は、相互に排他的な関係でないという点は先行研究で確認できた。しかし、どんな連続的な関係にあるか、まだはっきりしていない。
- ④ 「立派だな」に対して「立派なものだな」が時に皮肉に解釈されることについても先行研究ではまだ解明されていない。

以上の問題点を念頭に置いて次節以降で具体的な考察と検討を行う。

3. 複合形式の「ものだ」と助動詞の「ものだ」との区別

すでに述べたが、寺村（1984）は、「PハQモノダ」の文型をとって〈本性、本質〉を表す「ものだ」を、モノダと結びついた構造とし、助動詞として認めていない。しかしながら、「PハQモノダ」の文型をとった文のすべてが〈本性、本質〉を表すわけではなく、〈当為〉を表すことも可能である。このように、ある「PハQモノダ」文における「ものだ」がどんな意味用法を果たしているか、両者をどのように区別するかが問題点となる。寺村（1984）で見分ける方法が提示されているためここで引くことにする。

（前略）Qの部分を何かかんたんな形容詞で置きかえてみて、その場合と当のQモノダのモノダの意味が変わらない場合は、QモノダはQモノ+ダと見ることにし、そうでなく、Qモノダのモノダの意味が、この形でしか表わせない場合、そのモノダは一体化したもの、助動詞化したものと見る、というようなテストが考えられる。上の例でいうと、

- （6）病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感ずるものだ
（本性）（＝（4））
- （7）病人は わがままな⁵ ものだ
（本性）

⁵ 寺村（1984）は、学校文法における品詞の1つ、「形容動詞」という概念を「名詞的形容詞」と位置

→ (6) の「モノダ」は、名詞モノ+ダ

(8) 病人は看病人のいうとおりにおとなしく寝ているものだ(当為)

(9) 病人は おとなしい ものだ (本性と解釈され、当為とは解釈されない)

→ (8) の「モノダ」はムードの助動詞

(寺村 1984 : 300⁶, 二重線は筆者による)

以上の置き換えテストを見れば、〈本性、本質〉と〈当為〉との両者には鮮明な境界線が引けるように見える。実は下の(10)のような「ものだ」が同時に〈本性、本質〉と〈当為〉という2つの意味用法を表せることがある。話し手は単なる自分が認識している学生としての特質を述べているか、もしくは「学生としては、勉強に打ち込むのはあたりまえのことだ」という自分が認識していることを聞き手に伝えることで、聞き手の行動を要求するか、使用場面や発話状況などによってどちらかが前面化するのである。「もの」であれ、「だ」であれ、〈本性、本質〉は元々その語にあった意味ではない。むしろ両者が結合してから持つようになった意味だと考えられる。このように、〈本性、本質〉が助動詞の「ものだ」の意味用法の1つとして捉えられたほうが妥当であると考えられる。

寺村(1984)で提示された置き換えテストで「ものだ」に先行する「勉強する」の部分で「勤勉な」に入れ替えると、管見の限り、相変わらず〈本性、本質〉と〈当為〉のいずれとも解釈可能になる。つまり、置き換えられた文における「ものだ」の意味がまったく変わっていないと言えるだろう。「PハQモノダ」文における〈本性、本質〉と〈当為〉という2つの意味を見分ける手段として、寺村(1984)が示している置き換えテストは例(10)の場合ならば成立しなくなる。これはおそらく寺村(1984)は〈本性、本質〉と〈当為〉との2つの意味が1つの文に同時に存在しており、いずれも解釈可能ということを考えていない所以である。

(10) 学生は勉強するものだ。 (=例(3))

→学生は 勤勉な ものだ。

(11) 料理は男の方がうまいものだ。／料理は女の方がうまいものだ。

(坪根 1994 : 67)

→料理は 美味しい ものだ。

そして、例(11)はどうだろう。男の方か女の方か、話し手が一般的にどちらの方がうまい

づけている。すなわち、寺村(1984)でいう形容詞は、普通に言われている形容詞と形容動詞との両方を含んでいるのである。

⁶ 例文の番号は本稿における例文の番号順に従い改めてつけたものである。

と思っている文である。「一般化」しているために表面上、自分がそう思っているのではなく一般論だ（坪根 1994:67）ということ聞き手に伝える。寺村（1984）によれば、こういう〈本性、本質〉を表す「ものだ」文に置き換えテストによって簡単な形容詞を入れ替えると、「ものだ」が表した〈本性、本質〉の意味が変わらないはずであるが、「料理は美味しいものだ」における「ものだ」は〈本性、本質〉と解釈されにくいものになる。「料理は美味しいものだ」は文法的に適切な文であるが、料理に対する認識がそれぞれ違うためこの文は少なからず違和感を覚えさせる。

要するに、〈本性、本質〉と解釈できるか否かということは、「PハQモノダ」文における主題で示される物・人について、後にくる叙述は世間中にその物・人に関して一般的に認識された特徴や特質なのか、ということによって左右される。修学することが学生としての主たる義務という認識は世界中に共通しており、学生と言えれば勉強すべきだというイメージが強いのに対して、料理には「美味しい」ものもあるがもちろん「まずい」ものもあり、料理が言及されたらまず「美味しい」というイメージが出てくるとは言い難いだろう。そもそも料理に対する「美味しい」「まずい」という評価も人それぞれ違うため、「料理は美味しいものだ」と言い切ろうとも言い切れない。よって、後で詳しく検討するが、〈本性、本質〉の解釈が成立できるかどうかは主題の名詞に関わっているのみならず、「ものだ」に先行する部分も関与している。このように、寺村（1984）で提示された置き換えテストは、〈本性、本質〉と〈当為〉という両者の意味を見分けるのに有効な手段であるが、よくよく考えると当てはまらない場合も存在しているため批判的に受け取ることが必要であると考えられる。

寺村（1984）では〈本性、本質〉を表した「ものだ」が助動詞として認められていないが、実は〈本性、本質〉は助動詞の「ものだ」の他の派生した意味用法とつながっている基本的な意味用法と言える。そのため、本稿では、寺村（1984）でいう〈本性、本質〉を表す「ものだ」を助動詞の「ものだ」の意味用法の1つに位置づける。そうすれば、文に現れた「ものだ」は〈本性、本質〉を表した時、品詞性の面から見れば助動詞と認められるべきだということになる。それゆえ、〈本性、本質〉を表した「ものだ」を「もの」と「だ」との結びついた構造として捉えている寺村（1984）の考え方が間違っていると言えるのではないかと思われるが、必ずしもそうではない。

(12) 病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感じるものだ。 (=例(4))

寺村（1984）は、例（12）の「ものだ」は「もの」が「だ」と結びついた構造であり、〈本性、本質〉を表すとしている。その「ものだ」は、複合形式の「ものだ」と、助動詞の「ものだ」のいずれとも解釈できるため、構文化していない形式名詞とコピュラとの複合という構造と、構文化を経た助動詞の構造、という2つの構造をまたがる性質を有しているように見える。

しかしながら、例(12)の文に対して、「病人はいつも自分より軽症の者に嫉妬を感じることは一般的だ」という一般論的な解釈を導くのは普通だろう。こういう点からいうと、一見して(12)における「ものだ」は2つの解釈をまたがるものであるが、実は形式名詞とコピュラとの複合という解釈が背景化し、助動詞としての性質が前面化していると考えられる。つまり、「PハQモノダ」の文型をとって「ものだ」が〈本性、本質〉を表した場合、「ものだ」自体が「もの」と「だ」との結びついた構造として捉えられはするが、その派生した意味が出てくるため1つの固まりの言語形式だと判断できる。

それでは、形式名詞の「もの」とコピュラの「だ」とが結びついた構造として捉えられるのはどのような場面だろう。

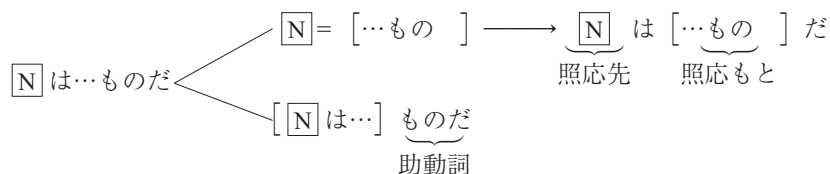


図1 「XはYものだ」の類別

- (13) 鍾乳洞は太古に海中にあったサンゴ礁が盛り上がってできた石灰岩地層に、雨水がしみ込み岩をとかして洞穴を形成したものだ。

(BCCWJ, 書籍, 東京ルネサンスと熊本・神戸の挑戦, 山本雄二郎(著), 下線は筆者)

加藤(2004)は、日本語の指示詞に、現場指示の直示、文脈指示の照応と知識指示の想起とといった3つの用法があると指摘している。直示は周囲の空間における眼前の対象を指し示すのに対して、照応は、指し示されるものがすでに言語的に表現されている。また、指示詞が照応詞にあたり、照応詞によって指されるのが先行詞であるように考えれば、先行詞が先に出て照応詞があとから出てくる照応用法を前方照応と言い、照応詞が先に出てそのあとに先行詞が出てくる用法を後方照応と呼ぶ、と加藤(2004)は主張している。本稿は指示詞を考察対象としないため、形式名詞の「もの」にも照応の現象が存在していると主張するが、用語と概念を紛らわしくさせないように、本稿は照応詞と先行詞との呼び方を用いず代わりに照応もとと照応先を使うことにする。つまり、形式名詞の「もの」が照応もとにあたり、照応もとによって指されるのが照応先であるということになる。

このように、(13)における「もの」は「照応もと」で、主題の「鍾乳洞は」は「照応先」であるということになると考えられる。つまり、「PはQものだ」という文型をとって、形式名詞「もの」と「だ」との結合とみなされる場合、「もの」が「照応もと」と認められれば、その「照

「照応先」はすでに言語的に表現された主題の「Pは」になる。それに加えて、照応を行われる文脈が先に出現するため前方照応になるとも考えられる。また、「鍾乳洞は太古に海中にあったサンゴ礁が盛り上がってきた…石灰洞だ。」というような、「照応先」の「鍾乳洞は」における名詞の「鍾乳洞」をそれと意味の近いほかの名詞「石灰洞」に置き換えても文意の変わらない自然な文になる。

文脈指示以外の場面では、形式的に「照応先」が特定されない可能性がある。主語は「これ」「それ」などの指示詞の場合、主語がさししめす目の前に実在しているものも「照応先」とみなされるべきだろうと考えられる。

(14) これはじゃがいもの皮をむくものです。 (寺村 1984 : 298)

(14)の用例を一見して「もの」と照応をなしている「照応先」は主題の「これは」であるが、「じゃがいもの皮をむく」皮むき器が目の前に存在しており、それを指し示しながら発話していると想定できるため、主題は発話の現場にある皮むき器を指し示す現場指示の用法にもなる。このように、「照応もと」としての「もの」の「照応先」は「これは」である、それに加えて、「これは」も「照応もと」とみなすことができ、「照応もと」の「これは」と照応する「照応先」は話者が発話する際に現場にある事物を直接認識して指示するものであると考えられる。つまり、「これ」「それ」などの指示詞は主語に現れる場合、「照応もと」としての「もの」の「照応先」は形式文脈にある指示詞であるが、主語としての指示詞も「照応もと」と認められ、そういう場合には「照応もと」と照応関係をなす「照応先」は状況文脈にある実在の事物というものになる。このため、「XはYものだ」という文型をとった場合、主語は指示詞であるとすれば、その文に文脈指示と現場指示が同時に存在しており、「二重照応」になるわけである。すなわち、「照応もと」の「もの」が指示詞の「これ」を「照応先」としながら文脈指示の照応関係をなす。一方、指示詞の「これ」は「照応もと」になると、話し手と聞き手の目の前にあるものが指示詞の「これ」と直示関係をなしている「照応先」になるのである。文だけに注目して分析を行なうならば、「照応もと」と「照応先」の位置が特定される。つまり、「照応もと」の「もの」と照応関係をなしているならば、その言語要素は「照応先」になる、ということである。しかしながら、語用論的な観点を取り入れて現実中の使用場面や発話状況を考慮すれば、「照応もと」と「照応先」とが移動する、変わりうる、というように扱うべきだと考えられる。

「XはYものだ」というのは形式名詞「もの」の照応性が現れた典型的な文型であると思われるが、そのような文型をとらずに「もの」に対応する主語や主題が一見して見当たらない文型においても、形式名詞「もの」が「照応先」として認められることも可能である。

(15) おそらく気まぐれな狩猟家か悪戯ずきな鉄砲うちが狙い撃ちにしたものに違いありま

せん。私は沼池の岸で一羽の雁が苦しんでいるのを見つけました。雁はその左の翼を自らの血潮でうるおし、満足な右の翼だけ空しく羽ばたきさせて、水草の密生した湿地で悲鳴をあげていたのです。(寺村 1984 : 303)

「XはYものだ」をとらない文型であり、一見して「もの」が具体的に何かを受けているかはわかりにくいようである。しかしながら、(15)における「もの」は意味的に次の文に現れた「雁」という鳥をさしめしていると考えられる。そのため、「もの」を「照応先」とみなせば、「照応もと」となるのが後接した文に現れた「雁」というものである。「照応もと」は「照応先」の後の文に出現したため、形式文脈の後方照応になると考えられる。

以上、形式名詞としての「もの」には照応性が認められており、形式文脈における前方照応か後方照応をなしているということが明確になった。さらに、「XはYものだ」という文型をとりながら主語や主題が指示詞であれば、「照応もと」は形式文脈にも状況文脈にも存在していると観察できたため、「二重照応」をなしていると考えられる。

4. 助動詞の「ものだ」の意味用法の見直し

本節では、先行研究を踏まえながら助動詞としての「ものだ」の意味用法について、なるべく細やかな作業を通じて、先行研究で十分に論じられていない点を追究し、明らかにしていく。

意味的な分析に入る前に、まず〈説明・解説〉という意味用法を取り上げておきたい。それは助動詞の「ものだ」の意味用法の1つとして認められることもある(寺村(1984), 坪根(1994), 日本語記述文法研究会編(2003))し、認められない場合(昶山(1992), 高橋(2018))もある。ここでは助動詞の「ものだ」に〈説明・解説〉の意味用法があるという主張を先駆的に提示した寺村(1984)の例文を挙げよう。

(16) このガラスの切口を見ると、だれかが、ダイヤモンドか何かの固いもので切ったものらしい。(寺村 1984 : 303)

寺村(1984)では例(16)を〈解説・説明〉を表す用法に帰属させるのは、「ものだ」が存在している文が前接した文、あるいは後接した文における事態が現れた原因・理由を提示するゆえんである。「ダイヤモンドか何かの固いもので切った」という事態が原因・理由となって「このガラスの切口」が存在しているわけだと判断されるのである。しかしながら、「もの」のある文とその前接か後接した文とは一方が他方の理由・原因を提示するような因果関係が確か存在しているが、それは「もの(だ)」があるからこそそのような関係を持つようになったのかと言えば、そうではない。

例(16)の「もの」を取り除けて、「このガラスの切口を見ると、だれかが、ダイヤモンドか何かの固いもので切ったらしい」の文に変えても自然な文が得られる。しかも、「だれかが、ダイヤモンドか何かの固いもので切ったらしい」は相変わらず「このガラスの切口」が存在する原因にもなりうる。すなわち、「もの(だ)」の存在が〈解説・説明〉の機能が成立するに必要で不可欠なものではない。ゆえに、この時の「ものだ」はただ形式名詞とコピュラの複合形式であると考えられる。

以上、本稿は、〈解説・説明〉を助動詞の「ものだ」の意味用法として立てないこととする。

4.1 〈本性, 本質〉について

- (17) *地球は太陽を公転するものだ。
(18) 人間というのは欲深いものだ。
→ a. 人間というのは「欲深いもの」だ。
→ b. 「人間というのは欲深い」ものだ。
(19) 学生は勉強するものだ。(=例(10))
(20) 学生は勤勉な／勉強する／*勉学のものだ。
(21) 人間は寂しいものだ。

現実・事実と切り離された抽象次元の事柄について、「～モノダ」は使えない、と藤田(2013)は指摘をしている。「ものだ」のついていない「地球は太陽を公転する」はまったく問題のない自然な文であるが、こういう物理的な真理・真実などを記述するには、「ものだ」が使えないのである(例(17))。〈本性, 本質〉が表したのは、あくまでも人間の考えや判断に関わる一般論的なものである。そのうち、世間に、もしくはある地域における幅広く認められる真理のようなものがあり(もちろん間違った認識も含まれる)、話し手自身だけが信じていることもある。

すでに述べたが、例(18)で示されている例文に、aの解釈が背景化し、bの解釈が前面化する。aは名詞述語文であり、「人間というのは欲深い生き物だ」のように「もの」を「人間」に近い名詞に置き換えても成立する。つまり、「もの」は形式名詞でありながら述語の機能を担当し、主題と前方照応をなしているのである。一方、bは「ものだ」が1つの固まりで先行する文を1つの事態・できごととして取り上げ、話し手が認識した「人間」の特質を述べるものである。後者における「もの」は他の名詞に置き換えられないのみならず、「ものだ」を削除すれば不自然な文にもなる。これこそ「ものだ」の〈本性, 本質〉の意味用法である。例(18)に対して、aの解釈はできるが、日常的な場面で使われると、話し手も聞き手も頭に浮かぶのはbの解釈だろう。

また、今までは〈本性, 本質〉を用いて説明を行なったが、これはあくまでも「ものだ」の研究の先駆者であると考えられる寺村(1984)の用語をそのまま援用したものである。〈本性,

本質〉の用語は、それが表す事態や事柄などが必ず真であるということを含意する。しかし、「ものだ」文が表すのは、真偽を問わずある種のこと・ものについて世間の人々がよく認識していること、もしくは発話者が自身の意思や判断を込めて一般的だと思っていることである。本稿では先行研究で〈本性、本質〉もしくはそれと類似している言い方で表される意味用法を〈一般性〉として捉えることとする。

また、先行研究で「ものだ」の意味用法を検討する際、「ものだ」に先行するものが動詞の場合を重んじて考察する傾向があり、形容詞と形容動詞についてはあまり言及されていない。動詞であれば意志性を伴う動詞が多用されるという指摘があった一方、形容詞、形容動詞は必ずしも意志性と関わらず、「寂しい」のような自分自身がコントロールできない感情でも〈一般性〉の「ものだ」の前に出てくることがある（例（21））。

なお、〈一般性〉の「ものだ」の前に名詞が出現することは不可能である。これはおそらく名詞の本質が関与しているだろう。動詞・形容詞・形容動詞それ自体が程度性・段階性を含むことが多いのに対して、名詞は静的なものを表すため程度性を有することは少ないのである。

さらに、〈一般性〉を表すため、「ものだ」に先行する語は連体形でありながら動詞の場合としては非タ形、つまり辞書形のみが「ものだ」の前にくるのだろうか。そうではない。

（22） 戦国の世では、長男は後継ぎとして特に大切に育てられたものだ。

（坪根 1994：72）

坪根（1994）は、「過去の習慣・回想を表す「ものだ」を説明するために例（22）をあげている。この用法が、過去における本性・本質を表す用法と考えるのに好都合な例であるとも述べており、整合性の欠けた説明をしている。「育てられた」というタ形が「ものだ」に先行するからこそ、「ものだ」を無理やりに〈回想〉と解釈してはいけない。戦国の時代のことなので、話し手は自ら経験して得られた常識のようなものではない。書籍やテレビ番組などから得た知識であり、「戦国の世では、長男は後継ぎとして特に大切に育てられる」のは一般的だったと話し手が認識しているのである。今現在の〈一般性〉を述べるのはもちろん、知識として頭の中で所蔵している今現在ではすでに適用していないことについても、その〈一般性〉を述べられる。

このように、〈一般性〉を表すとき、先行する語はテンス分化があり、非タ形もタ形も使えるという結論が得られる。

4.2 〈当為〉について

人の制御可能な行為についての妥当性、必要性などの判断は〈当為判断〉と名付けられている（高梨 2010：109）。〈当為判断〉を表す「ものだ」は、高梨（2010）では評価のモダリティ形

式と位置づけられている。また、〈当為判断〉の「ものだ」として解釈されるための要件を、次の3つにまとめている。

- 1) 当該事態が一般的に、もしくは、その場面において望ましいものである。
- 2) 行為者の意思によって実現可能な事態である。
- 3) その場面で問題になっている個別の行為者が当該事態を実現していないという状況がある場合、当為と解釈されやすい。

(高梨 2010 : 114)

当該事態が実現されていない状況というのは、いわゆる〈当為〉を表す「ものだ」文には「～しなかった」という意味合いが潜んでいる。

(23) 学生は勉強するものだ。 (=例 (3))

(24) 約束の時間に遅れるときは、まず連絡をするものだ。 (高梨 2010 : 110)

学生が勉強に打ち込むのはあたりまえのことであると(いう〈一般性〉を有する規範を)話し手が認識しており、聞き手が「学生」であり、かつ、ちゃんと勉強していないことに当てはまる場合、話し手は自分が認識していることを伝えることで、聞き手に同様の行動を促すことになる。「(一般的に学生は勤勉に勉強する。)だから、あなたもそうするべきだ。」という意味合いが加わる(つまり〈当為〉)。会話文ではちゃんと勉強していなかった人に「ちゃんと勉強しなさい」という軽い命令が読み取れるのみならず、相手への軽い非難も感じられやすい。

また、「連絡をしなかった」という解釈が引き出され、「連絡をすべきなのに連絡しなかった」という非難の気持ちも表出されている。「約束の時間に遅れるときは、まず連絡をする」のは一般的かつ常識的なものであると話し手が思っているので、相手もそうするべきだと押し付けるものである。また、「連絡をしなかった」という行為をしたのは話し手や聞き手でもなく、発話の素材としての第三者であれば、その実行を要求するより、第三者に対する文句を言うという解釈のほうがより自然だと考えられる。

(25) 学生は勉強すべきだ。

(26) 約束の時間に遅れるときは、まず連絡をすべきだ。

(23) (24) における「ものだ」は例 (25) (26) で示されているように、「べきだ」に置き換えられる。「ものだ」と「べきだ」との用法の相違について、日本語記述文法研究会編 (2003) は、「PはQものだ」の「P」の部分が、「総称的な名詞や、状況を表す名詞に限られる」(日本

語記述文法研究会編 2003:113) のに対して、「PはQべきだ」の「P」の部分が、一般名詞だけでなく固有名詞でも成立するというように指摘している。

(27) 君は、勉強 {*するものだ/すべきだ} (日本語記述文法研究会編 2003:113)

単文でなく、複文では主題が固有名詞の場合、「ものだ」の受容性が高まるだろうか。

(28) 田中はみんなに迷惑をかけたんだから、ちゃんと謝罪する {べきだ/*ものだ}。

「田中はみんなに迷惑をかけた」は特定の人物と特定のことについての記述で、〈一般性〉が考えられにくいためやはり自然な文にならない。つまり、「ものだ」に〈当為〉を読み取れるには、主題や主語は一般名詞であることが必須である。

また、筆者の考察したところ、〈当為〉の「ものだ」が表すある事態に対する望ましさは、ある事態がすでに発生した、しかし相手もしくは聞き手は話し手が望んだ通りに行動していなかった場合、事後あるいは事態の進行中において話し手自身が当たり前だと認識しているものを提示することで、相手の行動を促す、ということがわかった。その一方、「べきだ」は事態がまだ発生していない場合でも使える。

(29) 早く帰る {べきだ/*ものだ} よ。雨になりそうだから。

雨模様で雨が降りそうだと話し手が判断して、聞き手に「早く帰るべきだ」と言うのは適切であるのに対して、「早く帰るものだ」はこの場面では不適切である。「早く帰るものだ」は文脈や発話場面などを考慮しなければ問題なく自然な文であるが、(28)の場面では使いにくいものになる。また、帰り道でラベンダー畑に寄って自然を満喫した後家へ向かっているところ、夕立に降られて家に着いたらすでにびしょびしょになった自分が、濡れた髪をタオルで拭きながら独り言で「早く帰るものだ」と言うのは適切である。また、びしょびしょした様子になった経緯を聞いたお母さんは、濡れた髪をタオルで拭いている私に、「早く帰るものだ」と言うのも可能である。

以上からもわかるように、〈当為〉という意味用法の根底には〈一般性〉があり、〈一般性〉があったからこそ〈当為〉が生まれるわけである。個人の考えや判断を一般的なものとして引き上げられ、ある言語集団内における誰でも身につけるはずの常識や良識のような存在だと判断されることで、聞き手がその言語集団内の一員だとすれば、みんなが認識している常識や良識のように振る舞うべきだ、というようなプロセスで〈当為〉が派生してきたのである。会話文に用いられると、当たり前のことだから聞き手も自分と同じような認識や教養を持っている

べきで、持っていないければ常識のない人に思われる恐れがあるため、相手の実行を促すようになる。相手に行為要求をするため時には命令や指示と解釈されやすい。

4.3 〈驚き〉について

- (30) 【風呂に足を入れた瞬間】熱い！
【風呂に足を入れた瞬間】*熱いもんだ！

「ものだ」は知的判断を含んでいるため、現前において突如として生じた驚きを表すことに適さない。ある感情・感想を評価的に述べる「ものだ」の用法は、従来の研究で〈詠嘆〉〈感慨〉〈感動〉〈驚き〉〈感心〉〈感嘆〉〈あきれ〉など様々な呼び方として取り上げられている。しかし、「ものだ」が付け加わることで得られた〈感嘆〉というのは一体何なのか、まだはっきりしていないところである。

- (31) よくそんなことを言うもんだ。
(32) やってみるもんだ。／言ってみるもんだ。
(33) 【窓外の土砂降りを見ながら】よく降るもんだ。

「よく」と共起した「ものだ」文は、軽い冗談や皮肉的な意味合いを含むことが多い。(31)は「一般的には君だってこんなことを言うはずがないが、言ってしまった」という自分の認識とズレが生じたことについて感想を表出している。(32)は「言ってみると思ったより結果がよかった」「やってみると意外によかった」という意外性が読み取れるにもかかわらず、ネガティブな感情表出ではない。これは一種慣用的な表現として使われており、「もんだ」としてしまうと、文意もまったく変わってしまう。

天気予報で今日雨が降ることを知っているが、いざ降ってきたら想像以上の大雨だ。その土砂降りを見ながら、(33)の発話が可能である。この文における「ものだ」も副詞成分の「よく」と共起しているにもかかわらず、軽い冗談や皮肉的な意味合いが読み取れない。(32)と同様に意外性・予想外の意味合い、そしてあきれも少し含まれている。

要するに、話し手が思っていた、考えていた、期待していたこととズレが発生した聞き手の実際にやったことに対して、意外の気持ち、もしくは軽い冗談や皮肉的な意味合いを込めての感想・評価を表出しようとする場合、「よく(も)」のような副詞成分と共起することのある「ものだ」は使用される。本稿ではこのような用法を〈反期待〉と名付けることにした上に、以下のような定義を試みる。

〈反期待〉：話し手が自分の期待していたこととズレが生じるある事柄・できごとについて感

情・感想を表出すること。「期待」というのは、良い結果や状態を予期して、その実現を待ち望むことが多いが、期待していなかったのに良い結果を得ることも稀ながらあるということである。

〈反期待〉はあくまでも評価・判断を込めての感情表出で、「なあ」「ね」のような直感的・瞬間的に気持ち・感情を伝える終助詞とは異なっている。

〈当為〉は相手の行動に対して自分の認識していることを提示する一方、〈反期待〉は相手の行動や事態をそのまま提示するか、直接に感想を表出するか、ということである。

(34) 学生は勉強するものだ。 (＝例(3))

(35) よく遊んでいるもんだ。

遊んでばかりの友達に、自分の常識を提示することで相手の行動を促すこともある(例(34))し、相手の行動に対して自分の感想を直接に表出することもある(例(35))。軽い命令である前者に対して、後者は話し手が個人の感想を表出するのみで、必ずしも相手を自分の望んでいるように行動させるわけではない。

(36) 立派なもんだ。

(37) 早いものだ。

〈反期待〉の「ものだ」の直前に形容動詞や形容詞がくる例として、(36)(37)を挙げた。助動詞だと認められても、「ものだ」の前にくるのは相変わらず連体形である。「立派だな」「早いね」のような終助詞が主たる感情表出の役割を果たしている文と比較すれば、「ものだ」のついた文は瞬間的に感情を出すものでなく、評価や判断を込めたものである。しかも、「ものだ」の前に動詞がくる場合と同様に、「ものだ」がついたら文は軽い冗談や皮肉的な意味が持ちやすくなる。(37)は、「早いもので、…」のように従属節で使われることが多く、一種の慣用化した用法だと認められてもいいだろう。こういう時皮肉的な意味合いがまったくなく、時間の経つのが想像以上には早い、という自分の期待や想像とズレがあった場合に感想を表現するものである。

ここまで〈反期待〉の用法についてその直前に非タ形がくることを見てきたが、昔のことについて感想や感情を出すことも可能である。この場合、いわゆる〈回想〉の用法になる。

「ものだ」の〈回想〉の用法について、繰り返された出来事、あるいは一時期続いた状態を回想するものが多い、常に懐かしさを伴う、というような性質は先行研究よりまとめられる。しかしながら、ある一時期続いた事態(例(38))に懐かしさを伴う回想の意味を加えても「ものだ」がつきにくい(例(39))。

- (38) 私は北海道大学に四年間通った。
(39) ??? 私は北海道大学に四年間通ったものだ。

昔の出来事を思い出して表現するため、「ものだ」の直前にタ形しか許されない。〈回想〉は、単に、過去に常態であったこと、くりかえしあったことを述べる言いかた(たとえば英語の‘used to’)ではなくて、ある特別の感慨、なつかしさをもって過去をふりかえる情緒的な要素がなければ成立しない(寺村 1984 : 304)。寺村(1984)以降の研究ではその情緒的な要素を軽んじる傾向がある。ある一時的に続いたことであるため、〈一般性〉とつながりがあると考えられるが、〈一般性〉のような事態を述べることに重点を置く用法、および〈当為〉のような行為の実行を働きかける用法とは異なり、〈回想〉は〈反期待〉と同様に事態に対するある感情を表すところに重点が置かれた用法であると言えるだろう。

- (40) 昔、子どもたちは、この石塔を「アマノジャク」だといって、石でたたいて遊んだんだ。

(BCCWJ, 書籍, まんだら世界の民話, 烏兎沼宏之 ((著), 下線は筆者)

昔、子供たちが一時期において頻繁に行なった行動を述べており、〈回想〉と解釈できる。これは単純な回想ではなく、懐かしさを伴う過去における何度も繰り返したことについての想起である。一回限りの出来事なら使われにくいから、〈回想〉の「ものだ」の基底にも〈一般性〉があると考えられる。〈回想〉された出来事は過去における〈一般性〉があると話し手が思っているということである。ただ〈回想〉の用法に情緒的な要素がポイントだと考えられるため、〈反期待〉の下位分類として捉えることとする。

例(38)(39)に戻ると、(38)に懐かしさを加えようとすると単なる「ものだ」を追加すれば完全に自然な文にならない。

- (41) 私はよく北海道大学に四年間も通ったものだ

「ものだ」と同時に副詞成分の「よく」と副助詞「も」を追加すれば自然な文になる。「北海道大学に四年間も通ったあの頃の私はすごいなあ、今だったらなかなかできないことだなあ」というような意味合いが込められ、「北海道大学に四年間通った」自分への懐かしさに軽い感心が含まれている。

また、〈一般性〉や〈当為〉などの用法において「ものだ」それ自体はタ形が許されないのに対して、〈回想〉の意味用法では「ものだった」が許される。つまり、〈回想〉を表す「ものだ」の形式は「タ形+ものだ」と「タ形+ものだった」との2通りがある。

(42) 年を重ねてくると、月日が過ぎ去っていくのが早い。若いときは、未来は永遠にあるかの如くであった。時間はいくらだってあるように思えたものだ。一年の経つのであって、えっ、まだやっと一年と思えたものだった。四十代を過ぎると、一年があつという間だ。

(BCCWJ, 書籍, いま, 四十代を生きる女へ, マダム路子 (著), 下線は筆者)

「ものである」の連用形「ものであり」に過去の助動詞「た」の終止形がくっつけられたことで「ものでありた」が出てくる。「ものでありた」の促音便形「ものであった」はここで文体を一致させるため「ものだった」の形で用いられると考えられる。「ものだった」は「ものだ」の過去テンスであり、現在と切り離す遠隔性を持つ。遠隔性は懐かしさを強める機能を持つことがあるということで、無標の「ものだ」より感情が強まり、懐かしさも強く読み取れるようになると考えられる。

5. おわりに

本稿は、助動詞の「ものだ」を対象とし、複合形式の「ものだ」との見分け方、および構文で派生した意味用法について検討を行なった。

まずは、寺村(1984)で提示されている置き換えテストの適用性を確認した。それを通じて、〈本性、本質〉を表す「ものだ」は助動詞として捉えられるべきことを示した。しかも、形式名詞としての「もの」には照応性が認められており、形式文脈において前方照応か後方照応をなしていることに加えて、主語や主題が指示詞であれば、「二重照応」も生じる。

続いて、先行研究でよく捉えられている〈説明・解説〉を助動詞の「ものだ」の意味用法の1つだと認めない立場をとる。全体的には助動詞の「ものだ」に〈一般性〉〈当為〉〈反期待〉といった3つの意味用法があると見直した。話し手が認識していることを一般的なものとして引き上げる〈一般性〉は、話し手が直接経験したことを対象とするのはもちろん、知識として話し手に収蔵されている自分と離れた昔のことを表すことも可能である。

さらに、相手の行動について言及しないまま話し手が一般的に認識していることを提示することで相手の行動を促す〈当為〉と異なって、〈反期待〉は自分の期待や予想にズレが発生した相手の行動について直接言及する、あるいは感想を出すものであると考えられる。昔一時期続いていたことを思い出す〈回想〉に情緒的な要素が主たるものだと考えられるため、先行する語がタ形しか許されない〈回想〉を〈反期待〉の下位分類に位置づけた。

(ちょう りきたん・人文学専攻言語科学研究室)

参考文献：

- 加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』研究社.
- 高梨信乃（2010）『評価のモダリティ：現代日本語における記述的研究』くろしお出版.
- 高橋雄一（2018）「複合辞の「ものだ」と「ことだ」について—形式語としての「もの」「こと」の観点から—」『形式語研究の現在』279-297, 和泉書院.
- 坪根由香里（1994）「「ものだ」に関する一考察」『日本語教育』84：65-77.
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版.
- 藤田保幸（2013）「複合辞「～ものなら」について」藤田保幸（編）『形式語研究論集』p.125-154, 和泉書院.
- 初山洋介（1992）「文末の「モノダ」の多義構造」『言語文化論集』第14巻1号：19-31, 名古屋大学.

〈付記〉

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものです。そして、執筆にあたって貴重なご意見をいただいた加藤重広先生に感謝申し上げます。

